

アマメとシロメとサツキマスの話し(そとぼり通信 No.29)

著者	宮内 豊
雑誌名	日本文学誌要
巻	49
ページ	113-113
発行年	1994-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019741

アマメとシロメと サツキマスのお話

宮内 豊

岐阜県長良川のサツキマスの名を知る人は少なくないだろう。河口堰ができるので絶滅が憂慮されているうつくしいサケ科の魚だ。

そいつは五月になると広い海から長良川へ帰って来る。すっかり大きくなって、立派になって帰って来る。生まれ故郷の溪谷は桜や新緑の季節である。そこをめざしてそいつはひたすら流れを遡る。待ちかねた川沿いの太公望が釣りあげる。小さな神さまを釣るように釣りあげる。実際、住民にとってそいつは神さまでもあるようだ。アイヌにとってサケが神であるように。

サツキマスの親はアマメと呼ばれ、とても小さな魚だということを、去年、テレビのドキュメンタリー番組で知った。たぶん、吉

野川などでアマゴと呼ばれるものと同種の、ヤマメの仲間なのだろう。が、帰って来たサツキマスの体は、親の数倍も大きい。広い海で豊富な餌を喰い、たっぷり陽光を浴びたためである。危険も多かったろうけれど、切り抜けて帰って来たやつは、別種の魚のようにうつくしく大きく育っている。

ところが、アマメの子はどれも海にくだってサツキマスになるわけではないのだ。驚いたことに、サツキマスは稚魚のうちの落ちこぼれなのである。多くの稚魚は川に残って親と同じアマメになる。稚魚のなかで、餌に喰いはぐれ成長しそこなったドジな個体が、秋も深まり、山が紅葉に染まる頃、銀白色に変色して海にくだるのだという。彼らが親兄弟や友達と再会を誓うのかどうか分らないけれど、ともかく彼らは冬の来る前にいっせいに川をくだって行く。銀白色に変わるのには、日射しの明るい海ではその方が都合がいいからで、地元の人にはこれをシロメと呼ぶ。しかし、と私は思うのだが、シロメに変色する連中は、どうして自分はシロメになるべきだと察知するのだろうか。どうしてなのだろう。

この生態を知って、私は何だかひどく感動した。健気なものじゃないか。変ないい方だ

が、落ちこぼれの勇気のようなものが感じられるではないか。それに、何となく文学のころに通うものがあるように思えるではないか。うまく説明できないが、そんな風に感じた。

もっとも、シロメに変じて大海にくだってはみても、全部が全部、立派なサツキマスになって帰って来られるわけではない。またしてもドジを踏み続け、他の魚の餌食となるのこそまぬかれても、旧態依然シロメのままで遡上の力もなく、河口付近でマゴマゴしているのも皆無とはいえないであろう。

危ない危ない、話題が私自身のことになんて来て来た気配だ。

間もなく、大学前の濠端も桜、そして若葉の季節を迎える。いい季節である。私はこの変身譚を純然たる博物誌として書くつもりで、つい教師くさく寓意をこめそうになってしまった。何を読み取るのも読者の自由なので、自分に都合のいいように解釈して下さい。



(文学部講師)